

ダニエル書 - 第六十五番

預言の解き明かし：2020年7月18日の失望と、終わりの時代における「真夜中の叫び」の明らかになりつつあるメッセージを理解する

Jeff Pippenger

2024-01-29

2020年7月18日、神の終末時代の改革運動にとって最初の失望が訪れた。それは、第三の災いの歴史、すなわち後の雨の歴史であり、また十四万四千人が封印される歴史において、一つの道標となった。その歴史は、聖史におけるあらゆる改革運動によって表されてきたが、とりわけミラー派運動の歴史によって具体的に示され、十人の乙女のたとえによっても例示されており、すべての預言者が指し示した預言的歴史を表している。

2020年7月18日は、この運動における最初の失望を表しており、したがってそれは、十人の乙女のたとえとハバクク書における「遅延の時」の到来を示す。ミラー派の歴史では、彼らを誤った宣言へと導いたのと同じ証拠が、真の期日を特定するものとして見なされた。十人の乙女のたとえの「遅延の時」はそのとき現在の真理とされ、その「遅延の時」はハバクク書2章にある「遅延の時」と同一のものと理解された。十人の乙女のたとえは一字一句そのままに繰り返され、この事実は、賢い乙女か愚かな乙女のいずれかとなる資格があるのは、失望に関与していた者だけであることを示している。

ラオデキヤ的アドベンチズムの大多数は、2001年9月11日に第三のわざわいが到来したことによって試され、そして2020年7月18日の外れた予言が過ぎ去ったとき、ミラー運動史におけるプロテスタントがそうであったように、ローマへと当てもなく漂い戻るように取り残された。

ミラー派は、遅延の時を十人のおとめのたとえの成就と見なしただけでなく、ハバクク書において、たとえ遅れるようでもその幻を待てという命令が、同じ預言的な道しるべであることを見ていた。さらにハバククは、誤って解釈され、そのために最初の失望を生んだあの幻こそが、終わりには「語る」幻であることを確認している。

この幻は、なお定められた時のためのもので、終わりには明らかになり、偽りではない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。ハバクク書 2:3.

最初の失望を引き起こしたメッセージは、近い将来に成就したものとして認識されることになる同じメッセージであったが、なお、最初の誤った宣言において用いられた以前の預言的論拠に基づいていた。

ミラー派の歴史において、まず旧契約の民が試され、その後に新契約の民が試された。プロテスタントに対する試練は、1840年8月11日に、黙示録10章の第一の天使と黙示録14章の第一の天使（いずれも同一の天使）が降臨したときに始まった。彼らの試練は、第一の失望と、黙示録14章の第二の天使の到来によって終結した。

ミラー派の歴史において、ミラー派に対する試練は、最初の失望のときに第二の天使が到来したことから始まり、「真夜中の叫び」の到来で締めくくられた。ホワイト姉妹はこの「真夜中の叫び」を、第二の天使に加わる無数の天使として描いている。聖霊の力のもとで、「真夜中の叫び」のメッセージを認識して受け入れたミラー派は、自分たちの周囲に降り注いでいたそのメッセージを認識しなかったミラー派から分離された。1844年10月22日、第三の天使が到来し、遅れていた幻が語った。

十四万四千人の封印の歴史においては、まず旧契約の民が試され、その後に新契約の民が試された。ラオデキア的アドベンティズムに対する試練は、黙示録十八章の御使いの第一の声と黙示録十四章の第三の御使い（両者は同一の御使いである）が2001年9月11日に降臨したときに始まった。彼らの試練は2020年7月18日の失望によって終結した。

第三天使の運動において、十四万四千人に課される試練は、最初の失望が到来した時に始まり、真夜中の叫びのメッセージが到来することで完結する。聖霊の力のもと、今や真夜中の叫びのメッセージを認め受け入れる者たちは、その時、いま彼らの周囲の至るところに降り注いでいる多面的なメッセージを認めなかった愚かな者と悪しき者から、分かたれる。

間もなく来る日曜法の時に、黙示録18章の天使の第二の「声」が語る。これはまた、「遅れた」とされた幻が語ることでもある。また、それは、「大いなる叫び」へと「高まる」第三天使のメッセージをも表している。

真夜中の叫びは、先行する天使に加わる多くの天使として表されている。真夜中の叫びのメッセージには全体を形作るいくつかの要素があり、天使はメッセージの象徴である。ミラー派の歴史では、真の真夜中の叫びのメッセージをまとめ上げて先導した先駆者として認められているのはサミュエル・S・スノーである。その歴史には、スノーの真夜中の叫びのメッセージに対する理解が時間をかけて発展していったことがよく記録されている。

その歴史は文字どおり一字一句まで繰り返されており、最後の「真夜中の叫び」のメッセージは2023年7月末以来、公に展開してきた。それは単にイスラムのメッセージではなく、十四万四千人の封印に関するメッセージも含んでいる。それには、地の獣の二本の角がいずれも「死と復活」を経るという啓示が含まれており、獣の像と並行して、その同じ歴史の中で「八番目は七つのうちの一つである」という預言的な謎が成就する。またそれは、「七つの雷」の「隠された歴史」に関する啓示を含み、さらに、レビ記二十六章の「七つの時」が、ミラーの歴史のすべての真理を、1989年の終わりの時に解き明かされた真理とともに一つに織り合わせる糸であることが明らかにされる中で、退けられた「石」が「隅のかしら」となるという預言的な謎を成就する。詩篇記者はこう言っている：

建てる者たちが退けた石は、隅のかしら石となった。これは主のなさったことで、われらの目には不思議なことだ。これは主が造られた日、われらはこの日を喜び楽しもう。詩篇 118:22-24

「石」、すなわちウィリアム・ミラーが最初に見いだした「宝石」（そして宝石は石である）は、「主が造られた日」である。これまでの記事で示したように、安息日の戒めの構造と言葉は、レビ記二十五章に示されている七の聖なる周期の構造と一致している。第七の日に休むことは第七年に地が休むことを象徴しており、このように二つの戒めを考えるなら、一日が聖書の預言において一年を表すという証しを与える。

彼らはまた、レビ記二十六章にある神の「七たび」の怒りについてミラーが唱えた理解が「一日」として表されていることも示している。というのも、主は天地を六日のうちに造り、第七日に休まれたのと同じ確かさで、七年という聖なる周期をお定めになったからである。

イエスがぶどう園のたとえ話を語り終えたとき、彼はパリサイ人に質問した。

それで、ぶどう園の主人がやって来るとき、彼はその小作人たちをどうするだろうか。彼らは彼に言った。「その悪者どもを容赦なく滅ぼし、ぶどう園を、その時期に彼に実を納めるほかの小作人に貸し与えるでしょう。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたは聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。『家を建てる者たちの捨てた石、それが隅のかしら石となった。これは主のなさったことで、わたしたちの目には不思議なことだ。』だから、わたしはあなたがたに言う。神の国はあなたがたから取り上げられ、その実を結ぶ民に与えられる。この石につまずき倒れる者は打ち砕かれ、この石が誰かの上に落ちれば、その者は粉みじんにされる。」祭司長たちとファリサイ人がこのたとえ話を聞いたとき、彼らは、彼が自分たちのことを言っているのだと悟った。マタイによる福音書 21:40-45

ぶどう園のたとえは、かつての選民が退けられ、御国が新たな選民に与えられるというたとえである。イエスによれば、退けられた「石」は、どのように受け取られるかによって人を救いも滅ぼしもする「石」である。この「石」は、イエスが用いた文脈においては聖書の真理でなければならない。というのも、それには義の実を結ばせる力があり、キリストの義は、男も女も彼の真理の御言葉を受け入れるときにのみ、その人々のうちに生み出されるからである。

彼らをあなたの真理によって聖めてください。あなたのみことばは真理です。ヨハネ 17:17.

「石」は人に受け入れられるか拒絶される教義であり、イエスはみことばであり、また『使徒の働き』ではペテロがその「石」をキリストであると示している。

あなたがたすべての者とイスラエルの民すべてに、次のことを知っていただきたい。あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの名によって、この人はあなたがたの前で健やかにここに立っているのです。この方こそ、あなたがた建てる者たちに捨てられた石で、隅のかしら石となった方です。この方以外には救いはありません。私たちが救われるべき名は、天の下で人々に与えられている名のうち、この名のほかにはないからです。使徒の働き 4:10-12

そしてペテロの第一の手紙では、彼は「石」という象徴をさらに進めるが、それを、かつての契約の民の過ぎ去りと新しい選ばれた民の選び出しという同じ文脈にとどめてい

る。彼の言うとおりに、その新しい選ばれた民は「かつては民ではなかったが、今は神の民である。憐れみを受けなかったが、今は憐れみを受けた」。

あなたがたは、人々には確かに退けられたが、神に選ばれ尊ばれている生ける石のもとに来ている。あなたがたもまた、生ける石として、霊的な家に築き上げられ、聖なる祭司となって、イエス・キリストによって神に受け入れられる霊的ないけにえをささげるためである。ゆえに、聖書にもこう書いてある。「見よ、わたしはシオンに選ばれ、尊い、隅のかしら石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」このように、信じるあなたがたにとって、彼は尊い。しかし、不従順な者たちにとっては、「建てる者たちの捨てた石、それが隅のかしら石となった」。そして「つまりきの石、妨げの岩」ともなる。彼らは不従順で、みことばにつまずくのであり、そのために定められていたのである。第一ペテロ 2:4-8。

ペテロは、かつての選民についてこう言っている。「不従順な者たちに対しては、家を建てる者たちが退けた石が隅のかしら石とされ、また、つまりきの石、妨げの岩ともされた。すなわち、言葉につまずき、不従順である者たちにとってである。彼らはそのようになるようにも定められていた。」

イエスは、礎のすべての聖なる図像によって表されている。

だれも、すでに据えられている土台、すなわちイエス・キリスト以外の土台を据えることはできません。第一コリント 3:11

ミラー派が据えた礎は、永遠の岩（その石）であった。

「警告が与えられました。1842年、1843年、1844年にこのメッセージが与えられて以来、私たちが築いてきた信仰の土台を乱すものを、何一つ入り込ませてはなりません。私はこのメッセージに関わっており、それ以来ずっと、神が私たちにお与えになった光に忠実に、世の前に立ってきました。日々、切なる祈りをもって主を求め、光を求めながら、私たちの足が据えられたその土台から退くつもりはありません。神が私にお与えになった光を、私が手放すと思いますか。それはとこしえの岩のようであるべきものです。与えられて以来、ずっとそれが私を導いてきました。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年4月14日。

ミラーが発見し、「永遠の岩」のようなミラー派の土台の一部となった最初の宝は、レビ記26章の「七つの時」であった。そしてその「七つの時」は、ミラー派の土台を築き上げたばかりのミラー派の開拓者たち自身によって、最初に退けられた基礎的真理でもあった。礎を築いた建てる者たちが、その礎の石を退けることになったのである。キリストを象徴するその「石」は、また「主が造られた日」でもある。というのも、主は第七日を安息の日とし、第七年を地が休む年とされたからである。1863年に、その礎石は退けられた。しかしそれは「隅のかしら」とされ、不従順な者たちにとっての「つまりきの石」とされるのである。

第三の災いにおけるイスラムのメッセージは、十四万四千人の改革運動の主題であり、2001年9月11日にニューヨーク市の巨大な建物が倒壊したとき、黙示録十八章の天使が下って試しの過程が始まった。2001年9月11日が「東風の日」の到来であるという預言的な

認定について、アドベンチズムは沈黙していた。2020年7月18日、あの大いなる都の通りで黙示録第十一章の二人の証人が殺されたとき、彼らは取り残された。アドベンチズムに対する試しは終わり、イスラムのメッセージを認識していると公言していた者たちに対する試しが始まっていた。

2023年7月末まで街路に横たわっていた死んで干からびた骨は、エゼキエルの第一のメッセージによって呼び覚まされた。エゼキエルの第二のメッセージは、第三のわざわいにおけるイスラムの四つの風のメッセージであり、遅れていた幻、すなわち運動の全期間の主題である真夜中の叫びのメッセージが段階的に封印を解かれていくことを表している。その後、さまざまな真理の封印が解かれた。というのも、真夜中の叫びのメッセージは多面的なメッセージを表しているからである。死んで干からびた骨に最初に突きつけられた真理は、ラオデキア的アドベンチズムが最初に拒んだ真理であり、それはラオデキアからフィラデルフィアへの移行を画する真理を示している。

真理は封印のメッセージであり、ゆえに知的にも霊的にも心に確立される必要がある。通りで二人の証人が死んでいた期間が「七たび」の離散の象徴であると認識するだけでは十分ではなく、真理の体験的受容も求められる。

1798年の「終わりの時」に封印が解かれた真理を表しているミラーの宝石は、終末の乙女たちに対する試金石となる。「霊的」に真理に確立される経験はミラーの最初の宝石によって表され、「知的」に真理に確立されることは第三の災いにおけるイスラムのメッセージによって表されている。「七つの時」によって表される悔い改めと告白への呼びかけは、至聖所においてキリストと共に行われる働きを示しており、それは「mareh」の幻によって表されている。

「第三の災い」におけるイスラム教についての「知的な」理解は「chazon」の幻視によって示されており、そして「知的な」理解と「chazon」の幻視の双方が、印を受ける者たちには必要である。1863年、ラオデキア的アドベンチズムはエリコを再建することを選び、エルサレムを回復する働きから手を引いた。エリコは繁栄の象徴であり、それはラオデキア的な盲目さにも表れている。

「この地で最も堅固な要塞の一つである大きく富裕な都市エリコが、ギルガルの宿営からはわずかに離れているものの、彼らの目の前にあった。熱帯の豊かで多様な産物に満ちた肥沃な平野の縁に位置し、その宮殿や神殿は贅沢と悪徳の住みかであった。この誇り高い都は、分厚い城壁の背後にあって、イスラエルの神に公然と挑戦していた。エリコは偶像礼拝の主要な拠点の一つであり、とりわけ月の女神アシュタロテにささげられていた。ここには、カナン人の宗教における最も卑劣で最も墮落したものがすべて集まっていた。ベテ・ペオルでの自分たちの罪がもたらした恐るべき結果がまだ生々しく心に刻まれていたイスラエルの民は、この異教の都を、嫌悪と戦慄をもって見るほかなかった。」『族長と預言者』487頁。

1863年、彼らがエリコを建て直したとき、建てる者たちが退けた「石」は、終わりの日に「隅のかしら」となる真理（宝石）である「七つの時」であった。というのも、それは、ミラライトの運動におけるアドベンチズムの始まりと、十四万四千人の運動におけるアドベンチズムの終わりとを織り合わせる真理だからである。その宝石、すなわち「七

つの時」はまた「主が造られた日」でもあり、それはキリストご自身である。なぜなら、彼は御言葉であり、また「真理」だからである。イスラムという主題は、旧来の選民と新しい選民の双方に清めをもたらすテーマであり、その二重の清めは「東風の日」であった2001年9月11日に始まった。その日に見張り人たちは、キリストがぶどう園のたとえを宣べ伝えたときに歌ったのとまったく同じ歌を歌うはずであった。十四万四千人は、モーセの歌（「七つの時」）と小羊の歌を歌う。

そして私は、火が混じったかのようなガラスの海を見た。さらに、獣とその像とその刻印とその名の数に打ち勝った者たちが、神の豎琴を手にして、そのガラスの海の上に立っていた。彼らは神のしもべモーセの歌と小羊の歌を歌って言った。「全能の主なる神よ、あなたのみわざは偉大で驚くべきもの。あなたの道は正しく真実です、聖徒たちの王よ。」黙示録 15:2、3。

「小羊」は、ほふられたキリストであり、彼は二千五百二十日のただ中でほふられた。こうして、彼のいのちと血の犠牲（そこで彼は契約を確証した）を、レビ記二十六章にあるモーセの「彼の契約の争い」と共につなぎ合わせている。モーセと小羊の歌は、預言的歴史のchazonの歌であり、彼の「現れ」のmarehの歌である。それは、ダニエル書八章の二つの幻によって表される、知的かつ霊的な理解の歌である。それは、契約の民が裁かれて見過ごされる一方で、新たな選民が選び出される歌である。その選定の過程、したがってその歌は、2001年9月11日に始まった。

彼はヤコブから出る者たちに根を下ろさせ、イスラエルは花咲き芽吹き、地の面を実で満たす。彼は、彼を打った者たちを打ったように、彼を打つだろうか。あるいは、彼が殺した者たちの殺され方に従って、彼は殺されたのだろうか。量を定めて、それが伸び出すとき、あなたはそれと論じる。彼は東風の日、その荒い風をとどめる。こうしてヤコブの不義は清められ、これが彼の罪を取り除くすべての実である。彼が祭壇のすべての石を、打ち砕かれた石灰石のようにするとき、木立や像は立ち上がることはない。しかし堅固な町は荒れ果て、住まいは捨てられ、荒野のように放置される。そこでは子牛が草を食み、そこで伏し、その枝を食い尽くす。枝が枯れると、それらは折り取られ、女たちが来てそれに火をつける。これは分別のない民だからである。それゆえ、彼らを造った者は彼らをあわれまず、彼らを形づくった者は彼らを恵まない。その日、主は大河の水路からエジプトの川の流れに至るまで打ち落とし、イスラエルの子らよ、あなたがたは一人ひとり集められる。その日、大いなる角笛が吹き鳴らされ、アッシリアの地で滅びようとしていた者、エジプトの地で追い出されていた者が来て、エルサレムの聖なる山で主を礼拝する。イザヤ書 27:6-13。

正しく理解すれば、これらの節は2001年9月11日から、間もなく到来する日曜法に至るまでを示している。第六節は、根を下ろす植物の始まりを示すことによって、その全歴史を指し示している。植物は芽吹き、やがて花を咲かせ、つぼみをつけ、ついには地を实で満たす。地を満たす実がそうなるのは「時」、すなわち日曜法の危機の期間である。その時、キリストがご自分の実をご自分の穀倉に集めておられる一方で、同時にバビロンに裁きを下しておられる。地が実で満たされている時に起こるその裁きは、第七節に表されている。そこでは二つの問いが発せられる。「彼は、彼を打った者たちが彼によって打たれたのと同じように、打たれたのか。それとも、彼によって殺された者たちの殺し方に従って、彼は殺されたのか。」

そして8節では、後の雨の降り注ぎは「定められた量で」という表現で示されている。植物を芽吹かせるのは雨であり、後の雨の始まりについては、「芽が伸び出すときに、定められた量で」と示されている。後の雨が始まる時、それは「定められた量で」注がれる。刈り入れが真と偽の混合であるなら、無制限に注がれることはないからである。

真に回心したすべての魂は、他の人々を誤りの闇からイエス・キリストの義の驚くべき光へと導き入れたいと、切に望むようになる。その栄光によって全地を照らす神の御霊の大いなる注ぎは、私たちのうちに、神と共に働くとはどういうことかを経験によって知る、光を受けた民が起こされるまで、来ることはない。私たちが全き、心からの献身をもってキリストに仕えるとき、神はその事実を、限りなく御霊を注ぐことによって認めてくださる。しかし、教会の大多数が神と共に働く者となっていない間は、これは起こらない。利己心と自己放縦がこれほど顕著であり、言葉にすればカインの答え「私は弟の番人でしょうか」に表されるような霊が横行しているとき、神は御霊を注ぐことができない。もしこの時代の真理、すなわち万物の終わりが近いことを証する四方八方で濃くなりつつあるしるしの数々が、真理を知っていると称する者たちの眠っている活力を呼び覚ますに十分でないのなら、与えられてきた光に見合うだけの闇が、これらの魂を襲うであろう。最後の清算の大いなる日に、彼らが無関心について神に差し出さうと言いつつ存在しない。なぜ彼らが神の言葉の聖なる真理の光のうちに生き、歩み、働かなかったのか、そしてその行いと同情と熱心によって、罪の闇に覆われた世界に、福音の力と現実性が反駁し得ないものであることを示さなかったのか、その理由として差し出すべきものは何もないであろう。レビュー・アンド・ヘラルド、1896年7月21日。

ホワイト姉妹は、その箇所を、黙示録の天使が下ってくる時点だと特定している。なぜなら、彼女は「神の御霊の大いなる注ぎ——その栄光によって全地を照らすもの——」と言っているからである。これらの記事でたびたび引用してきた別の箇所では、彼女は「ニューヨークの大建造物が投げ倒されるとき、黙示録第十八章一～三節が成就する」と述べている。

これらの考察は次回の記事で続けます。

今や、わが愛する者のために、彼のぶどう畑について、わが愛する者の歌を歌おう。わが愛する者は、実り豊かな丘にぶどう畑を持っていた。彼はその周りに垣を巡らし、石を取り除き、最上のぶどうの木を植え、その中に塔を建て、そこに酒ぶねも設けた。彼は良いぶどうがなるのを待ったが、できたのは野ぶどうであった。今、エルサレムに住む者たちよ、ユダの人々よ、どうか私と私のぶどう畑との間をさばいてくれ。私のぶどう畑のために、私がしなかったことが、なおほかにあつたらうか。どうして、良いぶどうがなるのを待ったのに、野ぶどうを突らせたのか。今、さあ、私が私のぶどう畑に何をしようとしているかを告げよう。私はその垣を取り除き、食い荒らされるに任せ、その石垣を打ち壊して、踏みじられるままにする。私はそれを荒地とし、刈り込まれることも、耕されることもなくし、ただ茨と棘が生い茂るようにし、また雲に命じて、その上に雨を降らせないようにする。万軍の主のぶどう畑とはイスラエルの家であり、ユダの人々はその愛する苗である。主は公正を待ち望まれたが、見よ、虐げ。正義を待ち望まれたが、見よ、叫び。イザヤ書 5:1-7。